ブリキの人形

朝昼夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ブリキの人形

【Ｎコード】
Ｎ９５５５Ｍ

【作者名】
朝昼夜

【あらすじ】
ブリキの人形に八つ裂きにされる身と、夢と現実が交錯するお話。

本物という言葉自体が言葉だから既に本物ではないという理屈。唱えながら欠伸をするとそこからブリキの人形が飛び出てきて、一体ではなく何体もの数がゾロゾロゾロゾロと僕の舌から飛び出てくるものだから嫌だった。死んでしまいたいと心の奥底から願ってしまった。舌からブリキの人形が歩き出すということは恥だ。しにたい。もう誰にも顔向けがこれで出来なくなった。みんな死ね。爆発して欠片も残らなくなれ。邪魔だから消えうせて死ねよ。居る意味ないから。

　これじゃ駄目だ、つって頭を抱えながら呪いの言葉を振りまこうとも思ったがくだらないって思いが駆け巡ってそれすらも出来ない。つうか臭い。めっきり臭い。そこら中が。におってくる。きたねえ。しねよ。きたないんだよ。思春期とか関係なく純粋になってしまう、あるいはなってしまいたいと思うくらいに滅法臭い。あいつら。におってくる。自分でその匂いに気が付いてない。くせえ

　だけどそんな風な俺もブリキの人形を舌から出してしまった。何体も。もう手遅れだ。しにたい。しにたい。俺もたぶんくさい。しにたい。

　頭を抱きかかえたい。それよかこのブリキの人形をめちゃくちゃに壊したい。足元から頭の先まで一つ残らずゴミ屑に変えてやるよ。躊躇なく、一息で殺す。壊す。しにたい。殺す。壊す。しにたい。殺す壊すしにたい。というこのリズム。まったく快感じゃないリズム。しねいますぐ。

　ゾロゾロゾロ。ブリキの人形がまた増えてしまった。槍を携えて、僕の舌から滑り落ちた後はデスクで隊列を組み始める。何をするつもりだ、って叫んだ瞬間に一体のブリキの眉がトンガッタ。意志をあらわしていることは明白だ。やつは僕に俺に私に反抗する気

が満々だ。どうしようしにたくないころされたくない。いやだ。つってたけど、ブリキの人形に槍で目の玉を一突きされた。こうして僕は俺は私は失明した。

　失明してからその先のことは簡単に明記することが出来るが、一言で言ってしまうと身を八つ裂きにされた。

　どこもかしこももう動かない。ベットに縛り付けられてて毎日毎日ゆっくりと八つ裂き。槍と歯で。しにたい。ころされたい。はかいされたい。リズムカルじゃない。ころすこわすしにたい。リズミカル。違う、違う。そういうことじゃない。

　手を挙げて、と思ったら手はもう動かない。てか、なくなってる。悲しくなる。

　だから夢の世界に逃げた。現実逃避。

夏のひだまり。そしてひまわり。みんなが笑ってる。青空の下。縁側でアイスを食べてる。ペロペロと平らげてる。だけど、みんな笑ってる。

だけど、みんな顔には表情が無くて、目が魚みたい。こわい。

なんでそんなことになるの？　って僕は私はおばあちゃんに尋ねた。おばあちゃんは笑ってこういった。

「だって、ここ夢の中じゃけん」

あ、そうか。って僕は私は気が付いて周囲を見回すと、みんな俺のこと見てる。

「なにさま」

怒鳴りつけた。するとみんな姿形を変えて、ブリキの人形になって槍を僕の目玉に。

うあああっていう空しい叫びが青空に吸い込まれていきながら、フェードアウト。

何時しか、ベットの上に戻っている。

夢のまた夢の夢の夢。って言っているうちに気が可笑しくなったと勘違いしていた。

だけど、そのことを他人に伝えようとするのは憚られるという意識があるということは、僕は勘違いをしていないということじゃないだろうか。

狂った。おそらく。だけど、別にだからどうしたってわけではない。世界的には。どうでもいいって思われてる。お前のことなんざ知らんってさ。

だからナイフをもちだしたって訳じゃない。ブリキの人形だって槍を持ってるんだから、ナイフくらいもってたっていいでしょってことを言いたい。

だから、ナイフを持ち出していた。

秋の夕暮れ。人々は血に染まることはなくて、夕陽にばかり染められている。

僕は怒りを表したい。「いやだ」という叫び声で世界をナイフで切り裂いてやりたいぜ。俺は。わつぃは。

だけどナイフをビュンって振りかざした所で何にも切れない。夕陽は丸いままだ。ちっとも世界が個人的であって、世界が世界にならない。個人が個人にならない。わかれてる。人間はただの生物の一つだって叫ばれた。嘘、嘘。それは嘘だ。人間はかしこい動物。虎とかよりは賢い。……。？？？

冬になって、ナイフはもう折れていた。パッキリと折れてて、す

っかり雪の中に埋もれている。
隠したのだ。ある日朝にさ、起きて雪の中を駆けて、ナイフをうずめてやった。もう自分でもどこに埋めたかわからない。
だけど埋めたところから真っ赤な鮮血が。ああ、殺しちゃったよ、人間。って焦って掘り起こしたら、人間じゃなかった。
冬眠してた犬。だと思われる。突き殺してた。はじめ、勝手に人間だと思ってたけど、犬だった。やっぱり人間優先の意識だなあ、と納得する。そりゃそうか、だって俺人間だし、というフレーズも頭に浮かんだりした。だから、ナイフを犬から抜き取った。犬は「キャン」と痛々しいことをアピールしてきた。だから私は僕は俺は哀れに思って、ブリキの人形を犬に分けてあげた。犬は八つ裂きに。

目が覚めると、ベットの上だった。今日は右腕を失った。
「あしたはどこですか？」
と尋ねた。ブリキの人形は答える。
「あしたなんて、ありませんよ」
「そんな」
悲しみを堪えようとしたが涙が溢れた。
なんで報われないんですか、と叫びそうになった。
「あなたは贅沢な糞野郎だ」
とブリキに怒鳴られた。
「僕は自分のことをそんな風には思っていませんっ」
と私は答えた。
「どっちでもいい」とブリキの人形は突き放した。
「報われたい」
「だめ」
「ころしたい」
「だめ」

「なんとかしたい」
「だめ」
「ころしてくれ」
「いいよ」
「ほんと」
「ほんと」
「ほんと」
「ほんと」
「ほんと」
「ほんと」
「ほんと」
「嘘」
「嘘」
「嘘」
「どっち」
「ほんと」
がっかりした私に槍を振りかざすブリキの人形。右足に激痛。次の瞬間にはなくなっちゃった。
「かなしい」
「またあしたね」
そうして僕はまた夢の世界に逃げ込もうと決意した。足が痛くて仕方がなかった。
眠れないな、とも思ったがブリキの人形が眠らせてくれた。頭に石をぶち当てて。

春はあけぼの。ようようなんちゃらかんりゃ。
とおばあちゃんが歌っている。いや、おばあちゃんではない、おじいちゃんだ。
春はあけぼの。ようようなんちゃらかんりゃ。

何時までもどこまでも歌ってる。楽しいんですか、と僕は聞いてみた。おじいちゃんは笑いながら、

「楽しいよ」

と本当なんだか嘘なんだかわからない微笑を浮かべたのち魚のような目をしてしまって、どこか遠くへと気をやってしまった。

「もうだめなの？」

と聞くと、「年をとりすぎた」

と老人は答え、息を引き取った。

「春はあけぼの、ありゃらやりゃ」

私は歌を引き継いで、それから毎日歌を歌い続けている。老人に変わるときまで。

暇な時にはナイフに桜を掘り込む。桜は花びらを散らしながら、世の中に幸せなピンク色を撒き散らしているという実態。

実態調査。結果。不幸。

総合的な判断を下された。

「嘘だ！」

叫ぶ後にひぐらしの声。ああ、こりゃだめだな、つって言いながら、除除にフェードアウト。

夢から覚めた。

左足を切られた。とうとうだるまになった僕は、全てを切り落とされているから男も女も無い。

それはそれなりに嬉しい。そういう人間になりたいと思うことは度々あるから。だけれど死んだら元も子もないだろ（笑）

「おやすみ！」

ブリキが槍を振り下ろす。

ざじゅ！
最後は、脳味噌。

（後書き）

夏だからホラーばっかり。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能(たんのう)してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9555m/

ブリキの人形

2010年10月8日13時44分発行